

論文

ツーリズム空間の変遷に関する研究

—長崎を事例として—

根橋 正一

はじめに

ツーリズムあるいは観光は近代的な社会現象であると考えられ、社会学もまたモダンツーリズムをその研究対象としてきた。歴史的な旅や旅行に関する研究も近代とのつながりや比較の文脈で論じられてきた。さらに1980年代以降はポストモダンツーリズムに関する研究が盛んなのは当然のことといえよう。

社会学におけるツーリズム研究は、1950年代に始まった。マッキヤネルの研究⁽¹⁾は記念碑的研究であり、現在も繰り返し言及されている。モダンツーリズム研究として比較的整った理論を提起したのはヴァーレン・スミスらの研究⁽²⁾であった。その論文集の第2論文で、ナッシュは近代のツー

(1) Dean MacCannell, 1976, *The Tourist*, University of California Press, 安村克己ほか訳, 2012, 『ザ・ツーリスト—高度近代社会の構造分析』学文社

(2) V. Smith ed., 1979, *Hosts and Guests: The Anthropology of Tourism*, Blackwell 『観光・リゾート開発の人類学—ホスト&ゲスト論でみる地域文化の対応』

リズムがメトロポリスとデスティネーションという空間関係の中にあると論じた。カレン・カプランは、ツーリストはモダニティに宿るヨーロッパ中心主義に立っていると論じた。カプランらの研究はフーコーの空間論⁽³⁾やルフェーブルの空間生産論に触発されており、地理学由来のD・ハーヴェヤE・ソジャ等の研究ともつながっている。さらに、J・アリーの「観光のまなざし (tourist gaze)」論もまた空間論を基礎にしたポストモダンツーリズム研究⁽⁵⁾である。

我々の研究は、日本やアジアにおけるモダンツーリズムを対象とするもので、その意味では西欧近代との交流が始まり近代化の道を歩み始める幕末もしくは明治維新以降のツーリズム研究を主な課題としてきた。そんな中で本稿では、長崎という日本では唯一無二の外国とのさまざまな関係を体験してきた港町に注目して来崎する外国人ツーリストを研究対象とする。日本の近世社会はまだヨーロッパ世界経済（ワールドシステム）に編入される前で、中国との交易を最も重要とする時代に長崎にやってくる中国人游客がいた。幕末以降産業資本主義的なワールドシステムに編入される段階で、いち早く近代産業が開花した長崎は西欧人が居住し産業を興す産業都市として発展し、モダンツーリズムのデスティネーションとしても先駆けとなっていった。さらに1990年代以降の脱産業、ポストモダン時期には、新たなツーリズムの展開を見せている。長崎は、プレモダン、モダン、ポ

(3) Caren Kaplan, 1996, *Questions of Travel: Postmodern Discourses of Displacement*. Duke University Press, 村山淳彦訳, 2003, 『移動の時代—旅からディアスポラへ』未来社

(4) Edward Soja, 1996, *Third Space*. Blackwell Publishing, 加藤正洋訳, 2005 『第三空間—ポストモダンの空間論的展開』青土社

(5) John Urry, 1990, *The Tourist Gaze: Leisure and Travel in Contemporary Societies*, Sage, 加太宏邦訳, 1995 『観光のまなざし—現代社会におけるレジャーと旅行』法政大学出版局。Urry, 2011, *The Tourist Gaze 3.0*, Sage, 加太宏邦訳, 2014, 『観光のまなざし [増補改訂版]』法政大学出版局

ストモダンいずれの段階においても代表的なツーリズムデスティネーションであった。本稿では、なぜ長崎はツーリストを引きつけ続けてきたかの問いを掲げ空間論的な説明を試みる。まず近世の長崎が中国人游客を引き付けた理由についてその都市空間の特徴に注目し、次にモダン、ポストモダン段階におけるツーリズム都市長崎について考察する。

本研究では、プレモダン、モダン、ポストモダンの3つの段階に関する整理が必要になるが、それに関しては次の1章で論ずる。その後2章ではプレモダン時期の来崎中国人游客に関わる長崎のツーリズム空間について述べ、3章で幕末明治以来のワールドシステムへ編入され産業化される長崎におけるモダンツーリズム空間について、および脱産業段階における長崎のヘリテージツーリズムについて資料を示す。

1章 プレモダン・モダン・ポストモダン

モダンツーリズムはワールドシステムの誕生から展開のなかで発生したものであると考えられる。ワールドシステムについてはE・ウォラーステイン⁽⁶⁾の議論から以下のように整理することができよう。

ワールドシステムは「長期の16世紀」と呼ばれる15世紀中期から17世紀40年代までの時期に誕生した近代合理主義的な資本主義システムであり、中心—周辺という空間的な構造を特徴としている。誕生当初は北イタリアやイベリア半島のスペイン、ポルトガルといった地中海沿岸諸国が中心部を構成していた。ところが17世紀中ごろにはヨーロッパ経済の中心部が

(6) Immanuel Wallerstein, 1980, *the Modern World-System II: Mercantilism and the Consolidation of the European World-economy, 1600-1750*. Academic Press=1993, 川北稔訳『近代世界システム1600～1750—重商主義と＜ヨーロッパ世界経済＞の凝集—』名古屋大学出版会

北へ、太平洋岸へ移動した。その結果、それまでの中心であったイタリア、スペインが半周辺に移行し、逆にネーデルラント・フランドル、フランス北東部・西部、イギリス南東部といった地域が中心部を構成することになった。これら新たな中心部のうちオランダの台頭が著しく、1625～1675年ごろには「ヘゲモニー国」と呼ばれるほどであった。

ヨーロッパ経済がこのような状況にあった時代に、発生したのが、イギリス人などによるイタリアや南欧を目指す「グランドツアー」と呼ばれる南下旅行であった。近現代の国境を越える人びとの流れについてみれば、労働力移動は周辺・半周辺から中心部へ向いており、逆に国際ツーリズムの主流は中心部から周辺部へという方向になっている。この時期に流行が始まるグランドツアーはそのワールドシステム内最初のツーリズムであったと言えよう。半周辺地域に衰退したイタリアなど南ヨーロッパの各地は、ワールドシステムの新たな中心地であるイギリスやオランダ、フランスなどからの旅行目的地へと変貌したのである。O・ロフグレン⁽⁷⁾は次のように論じている。

地中海における観光産業の形成にはいくつかの位相がある。ブローデルの歴史研究によれば、17-18世紀の地中海世界の穏やかな衰退の間であり、ヨーロッパの経済的、文化的な中心は北西ヨーロッパおよび大西洋岸に移動した。次の世紀にはこの不均等はさらに激しさを増し、地中海世界はヨーロッパの辺境、僻地となり、そこからの主な輸出は移民であった。他方新たな輸入は旅行者であり、彼らは北方ヨーロッパのエリートで、古典文化を学び求める目的地として南ヨーロッパを目指したのである。(Lofgren: 157)

(7) Orver Lofgren, 1999, *On Holiday: A History of Vacationing*, University of California Press

グランドツアーに代表されるヨーロッパ生まれのモダンツーリズムは、中心—周辺構造のなかで中心部から周辺部への方向性をもつ人びとの移動という特徴をもっていた。その後ワールドシステムはアジア各地に拡大し、日本とも接触し、さらにその強力なパワーで植民地化し編入していくことになるが、その過程でモダンツーリズムもまた移植されることになる。

日本がワールドシステムと接触を始めるのは1543（天文12）年ポルトガル人の乗った船が種子島に漂着してからであり、ポルトガル人は日本との交易関係を開きさまざまな衝撃を日本に与えた。その後を襲って日本との関係を構築したオランダも鎖国政策下の日本に大きなインパクトを与えた。にもかかわらず、ポルトガルもオランダも日本へヨーロッパ生まれのモダンツーリズムを持ち込んだようには見えない。16～19世紀初頭までヨーロッパに起こったグランドツアーのような波が日本に及ぶことがなかったのはいかなる事情によるものか。その後19世紀には鎖国を解き近代化へ歩み始めると長崎には洋風ホテルが建設され、欧米人の企業家やツーリストも姿を見せるようになり、日本へのモダンツーリズムの上陸ということになった。19世紀中ごろを境にしたこの変化にどのような原因があったのか、日本のプレモダン、ポストモダンについての理解が必要になる。くわえて、20世紀後期から現在に至るポストモダン時期とポストモダンツーリズムについて、その国際的背景を整理しておかなければならない。次の3つの項で述べよう。

プレモダン

16世紀日本はワールドシステムの中心に位置していたポルトガル、そしてオランダと出会ったにもかかわらず19世紀に至るまでワールドシステムの枠外、つまりモダンの外に在り続けたることになったのにはいかなる事情によるものか。

ポルトガルやオランダは日本と接触したにもかかわらず、ワールドシステムに編入することはなかった。彼らは世界の海を往来し、各地で交易を行い大きな利益を上げていたにもかかわらず現地の経済を変更させることなく、ワールドシステムを拡大し、その経済分業に組み込むように作用しなかった。ポルトガル人はアジアに来て、そこに繁栄している「世界経済」を見出したのであり、彼らはそれをいささか改良し、その努力への報酬としていくらかの商品を持ち帰ったのであった。アジアの世界経済の社会組織にも政治機構にもほとんど手を付けることはなかった。⁽⁸⁾

ウッドによれば、⁽⁹⁾オランダは、商業の帝国であり、領土の征服や現地住民の強制労働などではなく交易の管理そのものに専心していた帝国である。商業的な帝国とは、商人階級、そのパトロンおよびそれを支える政府や貿易会社の利益のために運営される帝国で、ベネチア帝国やオランダ共和国が含まれる。オランダの主な関心は、ヨーロッパとアジアのすべての市場に参加する貿易路を確保すること、オランダ東インド会社など自国の商人や商社が商業的な利益を攻撃的に追求できる能力を維持することであった。植民地への関心を強めはしたがその目的は交易を円滑にするためであった。オランダは商業帝国の完成形であったゆえに、日本と接触しても日本をヨーロッパ世界経済に編入しようとしたりせず、交易を継続する選択をしていたのである。したがって、日本へモダンツーリズムが持ち込まれることもなかった。

(8) Immanuel Wallerstein, 1972, *The Modern World-System: Capitalist Agriculture and European World-Economy in Sixteen Century*, Academic Press, = 1981, 川北稔訳『近代世界システム—農業資本主義と<ヨーロッパ世界経済>の成立 I・II』岩波書店, II 243-244ページ

(9) Ellen Wood, 2003, *Empire of Capital*, New Left Books. = 中村元訳, 2004, 『資本の帝国』紀伊国屋書店, 117ページ

モダン

オランダ商業帝国とは異なり植民地獲得を指向するイギリス・フランスの世界戦略が台頭するとアジア諸地域も植民地そしてワールドシステムの経済分業の分担者として編入されていくことになる。イギリスは16世紀にアイルランドを植民地にし、続いてアメリカ植民地建設、18世紀にはインドを植民地化した。アイルランド植民地化の目的は、プランテーションによってアイルランド社会を変えることであり、植民者が入植して土地を農地にすることであった。そしてそこを「文明化」するだけでなく、イギリス経済のうちに吸収し、経済的に従属させることであった。⁽¹⁰⁾ J・ロックなどの理論を背景にしてイギリスの植民地経営が正当化され、合理的な土地経営としてのプランテーション農業を行い、本国を中心とする国際経済分業、すなわち本国工業製品の消費および必需品供給の体制に組み込み、それに寄与することが目指されたのである。

アジア諸地域もまた植民地あるいは租界地などとなり欧米の植民者、産業者を受け入れ、イギリスなどワールドシステム中心部諸国の必要に対応する経済分業の担い手地域となっていたのであった。そうした過程は、ワールドシステム内部へのあゆみであり、アジア各地もまたワールドシステムの周辺部として内部化されたといえる。そして、ワールドシステムへ内部化されたアジアにも、中心部への労働力移動と中心から周辺部へ向かうツーリズムの移動という人びとの移動が出現するのであった。

ポストモダン

1970年代欧米先進工業国が足を踏み入れた脱産業社会への道は、遅れる

(10) ウッド、前掲書、127-128ページ

こと20年1990年代以降の日本の進む道ともなった。1970年代欧米諸国が自国内における工業生産を他地域に移転する一方、日本を中心とするアジア諸国の工業化は驚異的な発展を見せ、アジアの4恐竜（韓国・台湾・香港・シンガポール）が世界の工業生産を支えた。新国際経済秩序（NIEO: New International Economic Order）あるいは周辺部フォーディズムと呼ばれる世界経済分業体制が形成された。その契機となったのは、1968・69年の欧米工業国に始まる労働者・市民・学生による反疎外、反公害（環境）の諸運動であり、その結果1970年代欧米諸国は工業の海外移転を行い脱産業社会へ移行した。その機に乗じて、日本は、疎外された工場労働を徹底的な技術革新、すなわち、機械化、オートメーション化、コンピュータ化によって工場における疎外労働から労働者を解放し、公害問題に対しても環境破壊を防止する技術開発することによって対抗したのである。脱産業化した欧米諸国は、ポストモダン社会、消費社会へと突入し、新たな中心産業の発展を促し、独自の社会態勢を形成していった。近代化、工業化、都市化のために破壊され改造され続けてきた自然や歴史遺産は保護・保存の対象へと180度変更され、自然的なものも、文化的、人工的歴史的なものも新たに富を産み出す資源としての地位を得て、新たな産業を興隆させる役割を担わされることになった。これら最先進諸国は消費国家として、生産の方向性を決定する消費力と第3次産業、つまりサービス産業、商業、暇つぶし産業を中心とする社会となり、工業国の上に君臨することになった。これが、脱産業社会、ポストフォーディズム産業、ポストモダンなどと呼ばれることになる。

ポストモダンあるいは情報化の過程は、工業からサービス産業（第3次産業）への労働力移動によって示されてきた。例えば支配的な資本主義国アメリカにおいては、1970年代からサービス業、すなわち健康維持から教育、金融、運輸、娯楽、広告にいたるまでの広い活動範囲の産業が台頭し

てきたのである。ここでさらに重要なのは、これらの職業を特徴づける中心的な役割が知識、情報、情動、コミュニケーションにおかれているということである。その意味で、ポスト工業化の経済を情報化の経済と呼んでいるのである。⁽¹¹⁾

サービス部門は、さらにつよく情報と知識の絶え間のない交換にもとづいているのであり、サービスの生産が結果的に物質的財や耐久財ではないから、こうした生産にたずさわる労働を非物質的労働と定義する。⁽¹²⁾たとえば、健康維持に関するサービス、娯楽産業も情動を作り出したり操作したりすることに焦点を合わせている。これらの労働は、手で触れることのできないもの、すなわち安心や、幸福感や、満足や、興奮や、情熱といった感情生産しているであり、やはり非物質的なものといえることができる。⁽¹³⁾こうしたポストモダン段階のツーリズムについてはJ・アーリのサービス階級論と遺産産業、遺産観光に関する議論に注目する。⁽¹⁴⁾

2章 来崎中国人游客と近世長崎の都市景観

近世長崎の都市建設の基本は、脱キリシタン都市および国際交易都市という2つの課題があった。

1. 脱キリシタン都市長崎

物理的空間の視点から言えば、町の景観あるいは地図に現れた街の様相

(11) Michael Hardt & Antonio Negri, 2000, *EMPIRE*, Harvard University Press = 水嶋一憲他訳, 2003年『<帝国>—グローバル化の世界秩序とマルチチュードの可能性』以文社, 369ページ

(12) 同上書, 375ページ

(13) 同上書, 377ページ

(14) アーリ, 2011=2014, 前掲書

の観察ということになる。江戸時代の長崎は、国際交易都市であることおよび脱キリシタン都市という目標によって建設された。長崎の歴史はキリスト教の伝道と切り離すことはできない。

元亀元（1570）年戦国大名大村純忠は、ポルトガル船との貿易による利益を期待して長崎港を開港した。その10年後天正8（1580）年、純忠は長崎と茂木をイエズス会に寄進した。イエズス会領になった長崎は全国各地からキリスト教徒や商人が集まり、我が国におけるキリスト教の中心地となった。ところが、天正15（1587）年豊臣秀吉は伴天連追放令を公布し、宣教師を国外退去させるとともに、長崎・茂木・浦上をイエズス会から没収し直轄地とした⁽¹⁵⁾。しかし、秀吉はイエズス会の布教活動を禁止し宣教師を退去させたが、他の宗派の活動を禁止することもなく信徒の信仰を禁止することもなかったため、長崎ばかりでなく全国にキリスト教徒は信仰を守っていた。

長崎の町にできた岬の突端に日本の教会全体を指揮する司教の家、全国で活動するイエズス会宣教師の本部、聖職者養成機関と印刷所などが置かれ、長崎の教会は発展した。さらに、慶長6（1601）年長崎の岬にあった教会が信徒たちを収容しきれなくなったため、被昇天の聖母の教会が完成した。長崎には、永禄11（1568）年トードス・オス・サントス（諸聖人）教会、天正12（1584）年ミゼリコルディアの教会、文禄3（1594）年山のサンタ・マリア教会、慶長8（1603）年サンティアゴ教会、慶長14（1609）年サント・ドミンゴ教会が建立されたほかフランシスコ会、アウグスチノ会の教会堂など16の教会堂があった。慶長12～13（1607～08）年頃の『伴天連記』は「我が国にたとえれば、日本における長崎はローマなり」と表現している。長崎は最もキリスト教徒が多い町で、慶長19（1614）年イエ

(15) 原田博二解説、2005年、『石崎融思筆 唐館図蘭館図絵巻』長崎文献社、30-31ページ

ズ会宣教師は「ここ（長崎）の5万の住民は、全部キリシタンである」と記しているほどであった。徳川家康の時代になっても新しくキリシタンになった人々の数は全国で毎年4万人、3万人と報告されている。イエズス会員で日本に滞在している129人のうち54人が長崎にいた。⁽¹⁶⁾

慶長17（1612）年幕府は天領、旗本領および有馬領にキリシタン禁令を發布し、翌年には「伴天連追放令」により全国に禁令を発した。⁽¹⁷⁾キリスト教に対する禁教の断行は、長崎の町の様相を全く改変していった。1614年キリスト教会はすべて破壊され、土地は没収された。その跡地には仏教寺院や神社、奉行所などの権力機関がその威容を示すことになった。宣教師や修道者らの外国人を排除し、交易に関わる外国人を出島や唐人館に収容することによって長崎の町から外国人の姿が消えていった。こうしたことが近世長崎の景観を構成する契機となった。

長崎でキリスト教が全盛の時期から布教のために来崎して活動した5人の仏教僧がいて、慶長年間（1598～1614年）に5カ寺（1604年正覚寺、1608年洪泰寺、1614年大音寺、大光寺、光永寺）を建立したほか、3寺が建立された。天和年間（1615～1623年）には8カ寺、寛永年間（1624～1643年）には25カ寺、正保年間（1644～1647年）10カ寺、慶安年間（1648～51年）3カ寺が創建され、合計66カ寺が長崎に相次いで姿を現したのであった。仏教寺院は来崎する中国人たちにも必要となるので、中国人の船主や商人の寄進によって創建され、栄えた寺院もあった。寛文3年の大火の後、船主たちの寄進は、唐三カ寺、聖徳寺、など多くの寺社に配分され、それらの創建や経営を支えた。大徳寺は元禄16（1703）年僧月珍によって建立され、幕府の保護のもとにあつて、官寺の性格が強かったため唐船主

(16) 長崎市史編さん委員会編、平成24年、『新長崎市史 第二巻近世編』、長崎市、25・26・29ページ

(17) 同上書、30-31ページ

らからの寄進などの配分も厚く、唐三カ寺や聖徳寺に次ぐ額であった。政保2（1645）年創建の安禅寺もまた官寺的で、幕府の保護の元に維持され、貿易で繁栄する長崎の象徴であった。⁽¹⁸⁾

慶長3（1598）年から寛永8（1631）年までの間に創建された29カ寺を「古跡」とし、それ以後の創建寺院を「新地」と区別した。古跡のうちでも最も早期の悟真寺は、慶長3（1598）年創建された。その後寺の維持経営に2人の在宅唐人が貢献し在留中国人の菩提寺となった。聖誉が創建した聖徳寺（寛永3・1626年）、興福寺（1620年）、福濟寺（1628年）、崇福寺（1629年）が創建されると中国人たちはこれらの寺の檀家になっていった。本蓮寺は、元和6（1620）年サン・ジョアン・パヴテスタ教会の跡地に日恵が創建した。春徳寺を創建しその住職であった臨濟僧泰憲清安は、唐船で舶載される書籍の中のキリスト教関係記述の有無を検査する「書物改役」に任命され、キリスト教関係の唐書の摘発に尽力し、寛永17（1640）年トードス・オス・サントス教会の跡地を下賜され春徳寺を移転した。⁽¹⁹⁾古跡寺院のほとんど全部は、幕府の切支丹対策を受けて長崎で布教活動を行い、奉行からおおいに援助を受けていた。

諏訪神社は、寛永2（1625）年唐津の修験者金重院賢清が、諏訪・森崎・住吉の三社を合祀、創建したことに始まる。天満宮を創建した修験僧高順は、キリスト教信仰が盛んだった時期に、布教を始めたが、外出の際には神像を背負い、杖を携えて護身の道具とした。慶長15（1610）年桜馬場天満神社の前身を創建した。その後諏訪神社、松森神社、八坂神社、伊勢宮神社などが創建され、寛永年間には12社、享保年間には14社が創建された。長崎では神社にも唐船主らがさまざまな寄進をこない、唐船の航海安全祈願、中国貿易の繁栄祈願などをした。神社もまたさまざまな形で中

(18) 同上書、89ページ

(19) 同上書、83～85ページ

国貿易にかかわっていた。⁽²⁰⁾

仏教寺院、神社の創建はキリスト教に代わって人々を日本的な信仰に組織化する役割を持っていた。まるで長崎の町を守るように取り囲む配置は寺社に守られた町であることを主張していたのである。

近世長崎は、3方海囲まれ、背後は数々の寺社が山並みを背景にして海に突き出た町域を囲み守護しているかのような構成になっていた。

2. 国際交易都市長崎

長崎は唯一の外国との交易が許された交易港であり、その業務を遂行するために町全体が組織化されていた。その中心にあった長崎会所は、仕事の分業態勢ばかりでなく、収入の居住者への分配の機能をも持っていた。また来崎する外国人たちの管理と保護という重要な役割を果たしたのであり、その主要なものはオランダ人のための出島、中国人を対象とした唐人屋敷であった。ここでは、長崎会所について分業と再分配の視点から、唐人屋敷について管理と保護の視点から述べる。

(1)長崎会所：分業と再分配

①分業態勢

長崎における交易は会所貿易と呼ばれる態勢で行われ、武士も町人すべてが貿易のための役割が振り当てられ組織化されていた。その中心に長崎会所があった。

長崎の行政機構の頂点に位置する長崎奉行の職務は行政官・司法官であるとともに、外敵の侵入およびキリスト教に対する警備司令官であり、また貿易を管轄する商務官でもあった。⁽²¹⁾ そのなかで武士階級といえ、長

(20) 同上書、90・94ページ

(21) 赤瀬浩、2005年、『<株式会社>長崎出島』講談社（選書メチエ）、114-115ページ

崎奉行支配の与力などの武士身分の者たちで、わずか30名足らずだった。⁽²²⁾

赤瀬浩による元禄15年の職制表によれば、長崎奉行の下に位置する地役人の組織は、大きく5部門すなわち、長崎会所・蘭方・唐方・町方・番方に分かれていた。蘭方には出島乙名以下日行司などの系列と大通詞以下の通詞の系列がある。唐方は屋敷乙名系列、唐通事系列が置かれている。町方は町乙名以下、組頭、筆者などの職が置かれている。番方には、御船頭、遠見番触頭、波止場役、唐人番の4系列がある。

町方の乙名は、町役人として市政・貿易事業を専業としていた。一般住民の居住する77カ町の惣町乙名が各町1名ずつ、丸山・寄合両町にも1名ずつ、唐人屋敷乙名4名、出島乙名2名、計85名が置かれた。さらに組頭や日行司が置かれ、乙名や組頭を補佐した。⁽²⁴⁾

各町には日雇い稼業の借家人たちがいた。都市長崎の正式の構成員は各町に土地と家屋を持っている者たちであるが、家持は約2、3割であった。借家人たちは、貿易にかかわる日雇い稼業で生計を立て貿易港としての長崎に貢献していた。家持と借家人とは大きな対立もなく、貿易にかかわる仕事を共有するコミュニティーを両者で形成していた。借家人や遊女であつても長崎という会社組織の構成員に位置づけられていたのである。⁽²⁵⁾

②再分配

江戸時代の長崎は、全国の他地域諸藩とは異なる再分配をおこなっていたがその中心的な役割を果たしたのも長崎会所であった。江戸時代の長崎には、農民や町人に対するさまざまな分配制度が組み込まれていた。貿易

(22) 同上書、118-120ページ

(23) 同上書、126-127ページ

(24) 前掲『新長崎市史』、第3章第4節

(25) 赤瀬浩、前掲書、144ページ

事業で獲得した富を町人たちに再分配したのであり、その中心機能を果たしたので長崎会所であり、町人に対して「箇所銀」「竈銀」などと呼ばれる銀で支払われる分配のほか、荷役人夫たちへの「こぼれ物」や丸山・寄合両町のから唐人行、オランダ行の遊女たちへの「貴物」と呼ばれる贈り物などが収入として認められていた。

箇所銀・竈銀

箇所銀は、長崎の市街地区に居住権を持つ者のうち、自分の家を持っている者に与えられるお金で、竈銀というのは、自分の家を持っていない借家人・長屋に住んでいる家族すなわち竈を単位として与えられるお金のことである。長崎会所の利益銀の中から合計金高7万両が与えられるもので「長崎地下配分金7万両の制度」という。所定の金額が長崎の町人に配られたのである。⁽²⁶⁾箇所銀・竈銀は、上は町年寄から下は借家人の独居老人にまで分け隔てなく配分されていた。⁽²⁷⁾

利益の再分配であり、長崎から高額な運上金を納めさせる「貢納」に対する「再分配」であるが、次の「こぼれ物」や「貴物」もまた、地下人たちに対する「再分配」の仕方と考えることができる。

こぼれ物

「こぼれ物」は、荷役作業中の事故で荷物からこぼれ落ちた砂糖や薬種など、売り物にならなくなったものを作業者に与えるもので、日雇いへの助成、あるいは再分配であった。借家人の多数は、貿易にともなう荷役に従事する日雇いたちであった。外国船が入港し、貿易が順調ならばそれなりの働き口があったが、貿易が衰退すると安定した職の確保が難しくなっ

(26) 同上書、443ページ

(27) 同上書、145-147ページ

た。日雇いたちには賃金日当1匁程度と弁当代が支給されたが、彼らの収入を補う助成として奉行所は、こぼれ物を黙認してきた⁽²⁸⁾。

もらい物・貰物

中国人やオランダ人から遊女に贈られた揚げ代以外のものは「貰い物」と呼ばれ、遊女や関係者の個人的な収入になった。古賀十二郎⁽²⁹⁾によれば、「当初、遊女並びに遊女屋仲間に於いて、高価に値する贈与を大貰と称し、高価に値せざる贈与を小貰と称していたが後に、貰砂糖、貰銀、貰銭、小貰などと区別するようになった。そして大貰と言う言葉は廃れていった。」

砂糖貰と言うのは、唐紅毛人より遊女へ贈る白砂糖のことで、高価に値するものであった。贈られた砂糖は、長崎会所で入札払いにしたうえで、代銀を遊女に渡すのであった。唐人は遊女のほかに、遊女屋、遣手などにも砂糖を贈っていた。(古賀：540-541)

これらの砂糖は、長崎会所に於いて、これを入札払いにしたる上、その代銀を貰主たる遊女、遊女屋、遣手などへ直渡しすることになった。随って、遊女、遊女屋、遣手などは、親しく長崎会所に至りて、直々代銀を請取る可きもので⁽³⁰⁾あった。

貰銀と言うのは、唐紅毛人より遊女へ贈与する銀をいう⁽³¹⁾。唐人の場合銀札もしくは正銀にて贈与されるが、銀札の場合は、長崎会所においてそれを受取って、正銀に替えて遊女へ下付することになっていた。紅毛人も、

(28) 同上書、152-153ページ

(29) 古賀十二郎、1968年・1995年、『丸山遊女と唐紅毛人 前編』長崎文献社、第三章2節

(30) 同上書、540-541ページ

(31) 同上書、520-251ページ

遊女や遊女小使いなどへ正銀を贈与することがあった。

貫銭と言うのは、主として下役唐人から遊女へ贈与する正銭をいふ。⁽³²⁾
 天明6（1786）年長崎奉行所は、下役唐人から遊女へ1人1度に銭5貫文までを限度として許可した。上役唐人は砂糖贈与をなしていたが、下役はその余裕がなかったので銭を贈ったのである。遊女町役人は、唐人屋敷の役人の監督の下、正銭を受取って、これを唐人屋敷から持ち出し、遊女屋を経て遊女に渡すのであった。

小貫と言うのは、唐紅毛人より遊女へ贈る反物、きれ類、小間物、其の他の物品の贈与を言う。概ね衣食住に必要な品物であった。⁽³³⁾遊女たちは、小貫の品物を、自己の使用のために貰い受けるのを原則としていたが、その品数が多い場合にはその一部を売却することができた。

こうした貫物は遊女や遊女屋にとって認められた収入であり、経済的な再分配の一種と言うことができよう。さらに、貫物のなかから町内の費用や人足雇用の費用、その際の弁当代などにも充てられ、町人、人夫たちにも間接的に分配されたのである。

こうした地下人に対する箇所銀・竈銀・こぼれ物・貫物収入は、いずれも長崎会所を通して公式に認められ、入手することのできるものであり、それゆえお上からの救済金であり、「再分配」であるということが出来る。

(2)唐人屋敷：管理と保護

明代、多くの中国人たちは、東南アジアや東アジア諸地域に移動し、商業活動をおこない、その地にとどまって中国人町を形成することがあった。

(32) 同上書、519-520ページ

(33) 同上書、520ページ

中国人の交易ディアスポラ⁽³⁴⁾が居住する町は唐人町と呼ばれ貿易で賑わった。日本では平清盛が建設した博多のほか、敦賀、平戸、鹿児島などに来住し、中国風の文化をもつ都市を形成していた。1571（元亀2）年の長崎開港以来、来崎して居住を許された中国人は、「住宅唐人」と呼ばれた。また、1635（寛永12）年交易の許される港が長崎に限定され、外国人の居住も長崎に限られると、九州各地の中国人が長崎に移り住むことになった。長崎で住宅を持つことを許された中国人も「住宅唐人」とされ、日本人女性と結婚することも、長崎奉行より「日本の姿」になることも許され、髪形を辮髪から丁髷に、衣服を中国服から日本の着物へ、姓を日本風に変え投化⁽³⁵⁾（帰化）した。

貿易のために来崎した中国人は長崎市中に住むことになっていたが、彼らは当然のように中国人ディアスポラの家＝住宅唐人宅を宿泊場所にして輸出入活動を行っていた。この渡来唐人を宿泊させる者は、船宿と称され、宿泊唐人の貿易の斡旋を行い、宿口銭と呼ばれる手数料を獲得していた。これは、売買高の何%かを得るもので、白糸の相対売買への開放によって売買高が増加して、かなりの多額にのぼり、船宿は大きな利益を得ることができた。渡来唐人による船宿の決め方は、指宿制で、唐人の指名によって決められていた。結局、長崎居住唐人宅が指名され、彼らが大いに利益をあげたのであった。この事態に対して、長崎に住む日本人の不満が次第に膨らんでいった。特に、寛文3（1663）年65町のうち63町を全焼する大火に見舞われ、この復興に長崎地下全体であたらなければならない事態が出現した。ここに提案されたのが振宿制と呼ばれるもので、渡来唐人の指名制を止めて、長崎地下で、いうならば各町に唐船の世話を振り分けて長崎

(34) Robin Cohen, 2008, *GLOBAL DIASPORAS: An Introduction 2nd*, Routledge = 駒井洋訳, 2012年, 『新版 グローバル・ディアスポラ』明石書店, 第5章

(35) 同上書, 578ページ

住民がなるべく公平に利益を得ようとする方向で改革が進められた。⁽³⁶⁾

幕府は増大する中国船を抑制し、密輸をなくし、キリシタンの影響をなくすために、外国人と日本人を隔離することを選び、中国人来崎者を収容する「唐人屋敷」の建設を決めた。元禄元（1688）年のことである。翌2年正月から、長崎に入港する一番船、二番船の中国人が入居した。許可者以外の中国人の外出はもとより、傾城（丸山・寄合両町の遊女）以外の出入りは固く禁じられた。また、特定の役人以外は二ノ門内への出入りは制限された。輸入貨物は日本側で預かり、中国人たちは厳重なチェックを受けて、荷用品等のみを携えて入館し、帰港の日までここで暮らした。

初期の唐人屋敷は二ノ門より内部に、中国人の住宅、土神堂のほか、風呂屋、辻番所などがあつた。住宅は2階建ての長屋で、長屋19棟、部屋数50部屋、1部屋あたりは3間×9間、ないしは3間×10間で、階上は船頭らの商人が使用し、本部屋と呼んだ。家賃は唐船ごとに支払われ、取引銀額100貫目に付き2貫119匁であつた。風呂屋は3間×7間の規模で、下段のさらに下の段に設置されていた。土神堂は元禄4年唐船船頭らの願いにより祠が設置されたのが始まりであつた。大門と二ノ門との間は地役人の駐在地であつた。⁽³⁷⁾

⁽³⁸⁾ 新地

新地は元禄15（1702）年に築造された中国船の貨物を入れる蔵である。東西70間、南北50間、総坪数3500坪で、12棟60戸の土蔵が建てられていた。構内は土堀で囲まれ、西番所、北門、正門、東番所、南番所がおかれていた。南側には水門が4つあり、一番水門、二番水門、三番水門、四番水

(36) 前掲『新長崎市史』、411-412ページ

(37) 原田、前掲書

(38) 同上書

門（新地荷物蔵水門）と呼ばれた。水門にはいずれも検使場や荒道具改場、手廻御改場があった。荷物のうち、砂糖、蘇木などの貿易品は荷物蔵に直行、収納されているが、手廻り品は手廻り品改場で検査される。改場には、御検使のほか御役所附、町乙名、小通事、通事などが立ちあった。検査に合格した品には、町役人が「改」の字を書き入れた。出番日行司の前には、籠に入れられた鶏や手足を縛られた豚が横たわっている。つぼの中を杖でつついているのは、「さぐり」と呼ばれる役人である。荷物蔵での検査は、検使の前で荷物が開梱され、その結果を宿町筆者が記帳している。収納が完了した倉庫の扉は厳重に閉鎖され、検使によって封印される。

四番水門の左には「唐人弁当所」がある。南東側の広場場に面した部分には、「御足輕」「南番所」「荒道具蔵」「立会乙名仲宿」「宿老仲宿」があり、長崎会所、唐通事、唐人屋敷乙名などの仲宿や土神堂などがあった。また、正門の左には各目利きの仲宿、右には町年寄の仲宿が並んでいた。

来崎中国人の滞在生活および商品に対する管理と保護が長崎町内の重要な空間を構成していることが分かる。

3. 中国人游客にとっての長崎

ここでは長崎空間のユーザーである中国人游客にとって快適な空間であった理由がどこにあったかについてみることになる。長崎は、交易都市として外国人に対する管理と保護に意を用いたことに加えて、中国人游客にとって、異国にありながら自文化を感じることでできるディアスポラ都市であったこと、及び游客を心地良くさせる遊興都市であったことが重要な特徴であった。

(1)中国人ディアスポラ文化

日本国内で外国人が居住する唯一の都市長崎は、住宅唐人と呼ばれる中国人ディアスポラが数多く住んでおり、中国的な文化や年中行事もまた生きづいていた。長崎の発展のなかで、多くの中国人が居住する町になっていった。⁽³⁹⁾ 中国人ディアスポラの存在が、長崎の町を特徴づけていた

唐通事

唐通事たちの家系は住宅唐人、すなわち中国人ディアスポラの末裔であった。

唐通事の家は、70数家あったが、訳司九家と呼ばれた大通事4役職と小通事5役職、合計9役職は、名門中の名門とされた穎家（陳冲一系）、穎川家（陳九官系）、彭城家（劉一水系）、彭城家（劉焜台系）、彭城家（劉鳳岐系）、林家（林公琰系）、林家（林楚玉系）、神代家（四郎佐衛門系）などに独占されたほか、こられの家の子弟たちは10歳前後で、⁽⁴⁰⁾ 稽古通事や小通事末席などに任じられた。

中国人ディアスポラの存在とともに、来崎中国人に安心感をもたせたのは、中国文化や中国的な生活、年中行事などであった。

唐寺

1571（元亀2）年の長崎開港以来、来崎した中国人は稲佐、水の浦、立神といった長崎港西岸地区に居住し悟真寺を菩提寺とした。来崎した中国人は、それぞれ出身地ごとに同郷団体の集会所、郷幫を組織していたが、これらが唐寺として整備されていった。興福寺＝三江幫、福濟寺＝泉漳幫、

(39) 陳天璽・小林和子編著、2011年、『グローバルディアスポラ1 東アジアのディアスポラ』明石書店、35-35ページ

(40) 前掲、新市史、578-582ページ

崇福寺＝福州幫といった具合である。これらの寺は創建当初、媽祖を祀る道教の祠堂としての性格が強かった。江戸時代に来崎する唐船は1艘に1(41)体媽祖を安置しており、長崎港に停泊中は、寺院が媽祖を預かっていた。

こうした唐寺は、来崎中国人たちの心のよりどころとなった。媽祖を預かるばかりではなく、中国の年中行事の舞台としてもよりどころであり、長崎滞在中の安心の源泉であったといえよう。

年中行司・祭り

中国人たちにとって、長崎での生活においても本国にいるときと同様な行事を催し祝うことのできる環境もまた安心の都市長崎を感ずるものになったであろう。中国関係の行事は多く行われていた。『新長崎市史』には、正月から年間を通しての行事があったことが記されている。(42)

上元祭：正月13日を上灯，15日を元宵，18日には落灯と称した。15日は観音菩薩の祭日で，唐寺では上元祭と呼んで祭礼が挙行された。

唐人踊り：2月2日，土地神の誕生日。

清明祭：3月の清明の日，唐寺や悟真寺に参詣。

媽祖勝会：3月23日，7月23日，9月23日の3回

関帝祭：5月13日，興福寺，福濟寺，崇福寺，聖福寺で，祭壇を設け供物を供え，読経。

盂蘭盆勝会：7月26－28日の3日間，施餓鬼の供養を行った。

冬至：冬至の日に酒宴を催し，唐人団子などを作って振舞った。

こうした行事は唐人屋敷に滞在する中国人ばかりでなく，長崎在住の中国人ディアスポラ，さらに長崎の住人たちも共に楽しむ行事であり，長崎

(41) 同上書，720ページ

(42) 同上書，620－623ページ

の中国的な雰囲気が増す日であった。このほか、中国文化を色濃く映している日本文化が長崎にはあった。

(2)日本の旅文化および遊女文化

中国人遊客にとって長崎が快適な目的地であった理由としては、受け入れ側である日本の旅文化や遊女文化がかかっていると考えられる。江戸時代前期にはすでに日本の旅文化や旅の技術がかなり確立していたのであり、こうした延長線上に長崎の外国人をもてなす文化が確立していたと考えられるからである。ここでは、江戸時代のたびの技術の確立と旅文化について概観し、次に長崎における丸山、寄合両町の遊女たちの文化についてみていくことにする。

日本の旅文化

日本の旅文化は江戸時代に始まったものではなく、さらに古くからの伝統がある。樋口清之はその著『旅と日本人』⁽⁴³⁾で古代や中世に遡って日本人の旅や道について考察すると共に、江戸時代に確立していく旅の文化について述べている。

近世日本に成立する旅は、山岳信仰にかかわる信仰の旅から発展してきたといわれる。山岳信仰は、人びとが霊山へ参詣し、信仰の道が形成される。足利時代になると各霊山が競って教団を大きくしようと「御師」という宣教師を全国に派遣する。御師の活動により各地の霊山といわれる山々に村々の人たちが参詣の旅をするようになり、信仰の旅が生まれた。霊山に登った信者たちは、下山すると精進落とし、すなわち商売女が宴席に出る宴遊をして、帰っていった。女から性の手ほどきを受けることもあり、

(43) 樋口清之、1980年、『日本人の歴史7 旅と日本人』講談社、第2章

成人式の意味をもつこともあった。伊勢参詣の旅も、信仰の旅であったが、門前の古市で遊ぶ、もしくは参詣後さまざまなところを見て歩く者も現れた。霊山の麓の里や有名な社寺の門前は門前町として栄え、多くの坊ができ、全国から信徒や旅を楽しむ者が集まった。

江戸時代一般人が観光や遊びなどの目的で旅することは困難であった。勉学、修行、治療、採薬などでも困難で、通行手形が発行されにくかったが、伊勢参りだけは別であった。伊勢神宮産経の後は京・大阪まで足を伸ばして見物した。また、四国八十八箇所や坂東三十三箇所などの観音霊場をめぐる巡礼の旅も盛んに行われた。⁽⁴⁴⁾

日本の旅は信仰の旅を原点として、物見遊山、門前町や宿場町における宿泊や宴遊、廓遊び、見世物や芝居などの見物といった遊興的、歓楽的な旅文化が発生し、発展していた。こうした、日本の旅の観念は来崎中国人たち、特に遊客にも心地よく映ったのではない。

遊女と傾城屋

日本の物見遊山、歓楽的旅の文化とともに、中国人遊客の心をとらえたものに、傾城屋および遊女の存在があったことは明らかである。日本の傾城屋および遊女に伝若干の述べておくことにしよう。

日本における売春の歴史を見ると、古代から近世にかけての売春のない時代から売買春が成立した時代、売買春が大衆化した時代の三段階が考えられる。⁽⁴⁵⁾ 第一段階から第二の段階への移行は、「対偶婚」から「単婚」へという婚姻制度の変化の時期であり、売春は遊女という芸能者に付随して現れたのであった。対偶婚から単婚への変化は、10～12世紀にかけて支配層から庶民にまで徐々に進行した。対偶婚とは区別される排他的・持続

(44) 同上書、93～108ページ

(45) 曾根ひろみ、2003年、『娼婦と近世社会』、吉川弘文館、第一章

的・制度的な一夫一婦の婚姻である単婚制のもとでは、妻の性が夫以外の男性に閉ざされ、やがて夫以外の男性との性関係は「蜜懷」として「夫による姦婦殺害」は当然のこととみなす観念が社会に支持されていった。このような婚姻制の変化にともなう蜜会（姦通）観念の成立と浸透の時期に売春が成立した。なぜなら、このような段階で初めて性が代価を支払っても手に入れる価値をもつものになったからである。この時期の発生した売春は芸能者によって行われた。すなわち、「遊女」「傀儡女」「白拍子」であり、遊女は質の高い芸能を身につけ、その芸を母－娘－孫娘へと女系で継承し、芸能奉仕の結果得る米・絹など報酬を遊女集団で受け取り、比較的自立した生活を営んでいた。遊女の芸能や性に代価を支払うことのできたのは限られた支配的な層の人々であった。

第三段階は、17世紀からであり、女性の身体が商品として純化され、売春が形態の上では多様化し、性の売り手・買い手ともに都市下層民まで拡大した時代であった。売買春の成立段階とは区別される「大衆化」の段階といえる。これを支えたのは、近世における貨幣経済の発展と都市の発展、都市・農村双方における階層分化の進展であった。また、婚姻制度でも「家父長の財産の純父系的な相続」を目的とした「嫁取婚」が武士と上層庶民を中心に典型的に行われた時代である。「蜜懷」は「姦通」と呼称を変え、公的権力が制裁を科す重大な罪とされた。

17世紀半ば吉原や新町、島原といった主要な遊廓が成立し、そのなかに多くの遊女が閉じ込められていた。ここでは、遊女は芸を身につけた芸能者ではなく、次第に「はいため＝売春する女」と同義になっていった。近世後期の遊廓の大衆化のなかで、遊芸とは無縁なもっぱら体売る「遊女」の増加と、遊女が「芸能者」としての地位を次第に「芸者」に奪われるという事情があった。

幕府が許可し、大都市ばかりでなく各地、各宿場に傾城町や廓ができ、

売買春が大衆化し、庶民も旅人も容易に買春できる売春社会が、近世の日本には出現していたのである。長崎における丸山・寄合両町の傾城屋もまたその文脈のなかにあった。

長崎丸山町・寄合町

丸山町・寄合町両遊女町は、総称して「丸山」と呼び、さらに略して「山」ということもあった。⁽⁴⁶⁾当初遊女屋は、古町や今博多町、桶屋町などの各所に散在していたが、寛永のころに丸山町と寄合町に集められた。散娼制から集娼制⁽⁴⁷⁾に変わったのである。丸山は、京の島原や江戸の吉原と合わせ称せられていたが、遠く海外にまで知られていたのはただ丸山だけであった。⁽⁴⁸⁾丸山の全盛期は元禄時代で、元禄5（1692）年1443人の遊女がいたがその後漸次減少の傾向にあった。花街の盛衰は、海外貿易の隆夷と平行していた。⁽⁴⁹⁾

曾根ひろみによれば、本来芸能者であった遊女は、17世紀に売春が大衆化するなかで、芸能者から売春専業者になったなかで、丸山では「遊女は根本白拍子であるから遊芸に意を留めるべきものであった。歌舞音曲に堪能でなければ、やるべきものではなかった」⁽⁵⁰⁾という認識が続いていた。

遊女はもとより読み書き一通りを心得おくべきものであったが、それよりも歌舞音曲の方がはるかに大切であった。遊女は能の謡をよくし、小舞乱舞を修むるほか、琴、三味線、胡弓などに長け、小唄はもとより浄瑠璃などにも意を注ぎ、遊芸に秀でるように心がけるべきもので

(46) 古賀、前掲書、103ページ

(47) 同上書、102-105ページ

(48) 同上書、115ページ

(49) 同上書、118ページ

(50) 同上書、298-299ページ

あった。(古賀：299)

しかし延宝の頃(1670年代)丸山では、能の謡などが廃れ、小唄や三味線が第一に心得おくべきものとなり、元禄・宝永の頃(1690年代・1700年代)は三味線の全盛期となり、能の謡や舞は⁽⁵¹⁾廃れていった。さらに、安永の末天明の初め頃(1770~80年代)、大阪の芸子が長崎に下り、地下芸子も勃興するに至り、遊女は色を売り、芸子は芸を売るものと認められ、その結果遊女たちは自然と歌舞音曲より遠ざかるようになった。⁽⁵²⁾

しかし、遊女たちは中国人やオランダ人と接する場合には歌舞音曲をもって接待したのであった。丸山遊女は唐人屋敷やオランダ屋敷において、自ら楽しむため外国人を楽しませるために日本の楽器、特に三味線を用いた。石崎融思の図絵には、唐人が琴を弾き遊女が三味線を弾く図がある。また、文化文政の頃の唐船主江芸閣は笛を善くしたので、月夜などには笛を吹き遊女の弾く琴に合わせたという。唐人の中には浄瑠璃に興味を持って、丸山遊女に附いて習い、遊女の引く三味線に合わせて浄瑠璃を語ったという。また、丸山遊女のなかでは、清楽(清の音楽)が盛んに行われた。遊女は概ね、月琴や胡弓をよくし、唱歌も中国語で歌った。中国語の唱歌に合わせて、月琴や胡弓、笛で合奏することもあった。丸山は清楽の本場⁽⁵³⁾で、唱歌や清の楽器に長けた遊女も多く、清の舞踊を学ぶものもいた。遊女たちは芸能者として唐人と接したのであって、白拍子の伝統のもとにあったということができよう。来崎した裕福な中国人遊客たちは、文化レベルも高く、歌舞音曲ばかりでなく、絵画や詩などにも通じた教養を見せる遊女たちに心地良さを感じたのであった。

(51) 同上書、299・303ページ

(52) 同上書、300ページ

(53) 同上書、307-310ページ

ここでは日本の旅文化および売春文化が長崎の町および丸山の中国人遊客たちへの接待文化に結晶して、心地良さを提供したことを示す資料を整理してきた。中国人遊客にとって長崎の快適さはこうした文化との接触で感じ取っていたと考えられる。現に、唐人屋敷に滞在し、丸山遊女とその時間をすごした多くの中国人たちが、子をなし、何度も繰り返し来崎した逸話が数多く残っている。来舶の唐人たちは、丸山遊女を愛していた。あるいは寧ろ耽溺したといたい。特に、若き唐人たちは、一度遊女を知れば恋慕の情いよいよ募り、商売にことよせ、万里の波濤を越えて遙々長崎⁽⁵⁴⁾へ渡り来るのであった。

2章では、脱キリシタン都市、国際交易都市、国際歓楽都市という相互に関連しながらも異なる側面から江戸時代の長崎について概観し、中国人遊客が来崎した理由を理解してきた。ワールドシステムと接触しながらもそれに編入される以前の中国人遊客の目的地となった理由は、長崎の都市空間から理解される。小ローマと呼ばれるキリシタン居住地から交易都市へと変わる長崎の課題は、交流と管理であり、町人や遊女を含む居住者全員を交易事業に組織する一方、来崎外国人に対する保護と管理を旨とする都市空間が形成された。それに中国人ディアスポラ空間、日本の旅・遊女空間とが重なって中国人遊客の目的地になったのである。

3章 モダン、ポストモダンとツーリズム都市長崎

19世紀中ごろ以降ワールドシステムに編入されモダンツーリズムの目的地になる近代的な長崎の理解が次の課題となる。近世唯一の交易港であっ

(54) 同上書、635ページ

た長崎は、ワールドシステムへの最初の窓口となり、イギリスの機器製綿製品を先駆とする工業製品の市場として、石炭や茶などの供給という国際経済分業の一端を担う周辺都市として発展する。しかし、長崎が果たしたその役割は、上海との関係の変化や横浜や神戸の発展に圧倒され産業都市としての地位は後退していき、ツーリズム都市への移行が選択される。さらに1990年代から現代にかけてポストツーリズムの時代が始まるとヘリテージツーリズム都市へと方向性を変化させている。こうした変化を以下の4項目で論じていく。

1. ワールドシステムへの編入

長崎を窓口としたワールドシステムとの接触は欧米人企業家たちの来崎と起業、および上海ネットワークと呼ばれる交易システムとの結合によってもたらされた。

(1)産業都市化する長崎

ワールドシステムへの参入もしくは編入というのは、具体的にはヨーロッパ世界経済において何らかの国際分業を担当することを意味する。ヨーロッパ世界が必要な物品を供給する、そしてヨーロッパが生産した工業製品を消費するマーケットの役割を果たすことである。日本は幕末から明治初期にかけての時期にワールドシステムに周辺として編入されていくと考えられるが、その最初の窓口になったのが鎖国時代に世界への窓口となっていた長崎であった。このような状況を準備する先駆的な役割を果たしたのがT・グラバーであった。グラバーの足跡を史料によって見ておこう。

グラバーは、英国スコットランドの産にして安政6年9月はじめて本

邦に渡来し、兵器、船舶、諸機械および綿等を輸入し貿易を営む傍ら、長崎市外小菅にドックを設けて造船業を起こし、高島に炭鉱を開きて石炭採掘を開拓し、製茶業を起こしてその輸出を図るなど、日本の事業界の啓発に貢献するのみならず、薩摩・長州・土佐などの勤皇諸藩に軍器、船舶を提供し維新の大業に間接の援助を与えるがごとき隠れたる偉勲は明治維新上に特筆すべき価値あるものとなす。長崎三菱造船所の今日あるをえたるもまた氏の勲勞に負うところすこぶる大なり。⁽⁵⁵⁾

1859年に長崎にやってきた21歳のグラバーは、ジャーディン・マセソン商会の代理業務を引き受け「グラバー商会」を大浦2番に開いた。⁽⁵⁶⁾業務としたのは、輸出では茶・絹・樟脳・煙草・銅・海産物など、輸入では綿織物・鉄製品・英国炭・砂糖などを扱ったが、さらに茶再生加工業を開いた。イギリス人が好むのは発酵茶であったが、日本茶は乾燥が十分でなく海上輸送や倉庫保管の段階でカビが生えるという事故が多発していたので、日本茶にもう一度火入れして乾燥度を高める作業をおこなったのである。⁽⁵⁷⁾長崎でグラバーは、修船所（ソロバンドック）に始まる造船業や高島炭鉱の開発を行ったが、いずれも日本における近代産業の先駆的な企業であった。

これらの産業は欧米先進工業国が必要とする茶、石炭、修船などを供給する工業の日本における開発であり、日本のワールドシステムへの参入を意味するといえる。グラバーを先駆者として多くの欧米人企業家が長崎で諸産業を起こし、長崎は近代産業の誕生の地となった。

(55) 内藤初穂，2001、『トーマス・グラバー始末—明治建国の洋商—』アテネ書房

(56) 同上書，59ページ

(57) 同上書，62-63ページ

(2)上海ネットワーク：ヨーロッパ工業製品のマーケット

ワールドシステムにおけるもう一つの役割は、先進工業国の工業製品のマーケットとしての長崎である。1870年代半ば長崎港への入荷のほとんどが中国、特に上海からの輸入品で占められており、長崎貿易における中国商人の比重も高かった。中国商人は海産物、木材、雑貨など長崎からの輸出のほとんどを手中にしていただけでなく、綿製品、砂糖、綿花などの輸入品の多くを独占的に取り扱っていた。彼らは、蒸気汽船航路を開設し、東シナ海を頻繁かつ機敏に移動した。長崎輸入のイギリス製綿布のほとんどもまた中国商人の手によって上海の綿布オークションで購入されていた。⁽⁵⁸⁾日本は中国商人の手によってヨーロッパの工業製品のマーケットとしてワールドシステムに編入されていったのである。

イギリスによるワールドシステム拡大は、植民地主義と木綿製品のマーケット拡大を通して行われたが、日本への接近は上海－長崎経由で進んだ。アヘン戦争後開港した上海は近代都市化が進み「東洋のパリ」と称され、ワールドシステムの東アジアにおける中心的な役割を果たしていた。イギリス製の木綿製品のマーケットとして長崎を窓口にして日本はワールドシステムの周辺部に編入されたのであった。

ここでもう1点注意しておくべき事態がある。それは、長崎は周辺部の都市としてばかりでなく、朝鮮半島をさらなる周辺地域に編入する機能ももったことである。

1870年代後半から80年代の日朝貿易は、日朝2国間条約に基づいたものであるが、同時に上海を中心にした交易関係が長崎さらに朝鮮の開港場へと延びていく東アジア域内交易としての内実を備えていた。日朝交易は、朝鮮の日本への輸出は米・大豆・牛皮・海産物、砂金で構成され、日本か

(58) 古田和子、2000、『上海ネットワークと近代東アジア』東京大学出版会、71-71ページ

らの輸入は綿布を中心とした繊維製品で構成されていた。この繊維製品は日本製ではなくイギリス製であった。東アジアにおけるイギリス製木綿製品の流れは、上海においてイギリス商社から中国商人へ、長崎で中国商館から日本商人へ、さらに朝鮮の元山や釜山で日本商人から朝鮮商人へという担い手を經由して⁽⁵⁹⁾おこなわれた。

この長崎を仲介港とする木綿貿易は、朝鮮の需要増大を受けて1870年代末から増大し、1887年に最盛期を迎えたが、1888年中国輪船招商局が上海－仁川の蒸気船の定期航路開設したことで、長崎の役割は消滅した。

2. 産業都市からツーリズム都市へ

19世紀末以降長崎は産業都市からツーリズムの盛んな都市へと変化することになった。それには2つの原因が考えられる。一つは、ワールドシステムの周辺都市として長崎は、西洋人が居住する近代的な都市であったこと、第二は産業都市・交易都市としての役割の後退である。

ワールドシステムに編入され、その過程で中心的な役割をはたしていた長崎が中心や周辺部アジアの中心上海に居住する観光客にとってのまなざしの向く地、すなわちデスティネーションになっていったのはなぜか。こうした問題に関してカプランは、「欧米の亡命者も観光客も帝国主義ノスタルジアにとらわれて周辺を目指し、〈自然〉〈失われた民族や文化〉を求めて、ますます遠くへ移動せずにはおられなくなる⁽⁶⁰⁾」とモダンツーリズムの本質を説明する。

観光客は失われた、あるいは被征服の地にあるはずの「真正性」の確かなしるしを探し求める。それゆえ観光客はモダニティに宿

(59) 同上書、5、69、81ページ

(60) カプラン、前掲書、97－98ページ

るヨーロッパ中心主義に立っており、経済的不均衡を構造として持っている世界を旅する、すぐれて欧米的な存在であり、植民地時代の遺産から切り離すことはできない。ツーリストは「ヨーロッパの世界を支配するという壮大な野望の挫折にささげられた記念物」を経巡り歩くことであり、経済的破綻から発生し「開発」された手ごろな訪問地を対象とすることになった。(カプラン：117-118)

長崎もまたこのような過程を経てデスティネーション、すなわちツーリズム都市へと移行していくことになった。

(1)西洋人居住と近代都市空間

西洋人が居住する大浦居留地は、大浦湾に面する一帯で海水が上流まで注いでおり、大浦船津といって各地からの廻船でにぎわった、風光明媚な浦であった。安政5（1858）年修好条約締結・開国にともない、埋め立てて海岸通りや居住地域を造成した。東山手地区は最初の居留地で、次に指定されたのが南山手地区であった。幕府は、さらに大浦海岸一帯を埋め立てて外国人居留地として指定した。これらの埋め立て地は合計34,350坪余りであった。かくして、文久3（1863）年居留地地区を定め、42区、33番にわり、これに町名を付けた。出島町、新地町・広馬場町・常磐町・大浦町・松が枝町・東山手町・南山手町である。東山手一帯は、概して官公舎および私邸であった。梅が崎から大浦、下り松海岸通りは、貿易会社、運輸会社、銀行などが軒を並べ、その裏町一帯には倉庫が林立し、ホテルなども混在して、ビジネスセンターを構成していた。下り松海岸通りには修船関係の業者、すなわち船具商・造機・諸機械・同部品類商などが多く、機械工・鉄工・鉛管工・船大工などの職人まで存在し、この辺りはあたかも船大工町の様相を呈していた。下り松の最南端には、造船所（外人経

営)が2か所あった。大浦川に面する南北両側は、ほとんど外人オンリーのバーで、その付近にはホテル、食料品、雑貨、飲料水製造業などがあまた軒を並べていた。大浦居留地のメインストリートで、外国人向け商店であると同時に歓楽街、盛り場でもあり、にぎやかな街であった。⁽⁶¹⁾

外国人居留地に居住した外国人は、1862(文久2)年、オランダ人・中国人のほか、アメリカ・イギリス・ポルトガル・フランス・ロシアの人びとがいた。欧米人91人、中国人116人であった。その後外国人は増加して、1870(明治3)年には、ベルギー・デンマーク・オーストリア・ノルウェーなどの商業活動に参加していた。外国人数が最大であったのは1900(明治33)年で1,918人であったが、その後次第に減少し1921(大正10)年には1,212人となった。⁽⁶²⁾

活況を呈した居留地にはビジネスマンばかりでなくその家族も居住し観光客も増加したため、西洋風ホテルが開業していた。例えば、1870年開業のバンク・エクスチャージ・ホテル、ベル・ヴュー・ホテル、コマースヤル・ホテル、1871年開業のオクシデンタル・ホテルなどがあつた。

(2)産業都市からツーリズム都市へ

国際経済分業の一角を占める産業都市として発展してきた長崎は、19世紀末期には、その役割が減じてきた。1888年上海-仁川間の直行航路が開設されて以降、長崎港の役割の喪失が始まり長崎の貿易産業が衰退していく。1900年中国における義和団の乱の影響、1902年米軍の艦船の入港の必要性の喪失、1904~05年の日露戦争の影響といった国際的な出来事のなかで長崎の国際港としての役割は減少し、その地位は低下した。

1900(明治33)年中国山東省で発生した義和団の乱は、「扶清滅洋」を

(61) 浜崎国男, 1994, 『長崎異人街史』葦書房, 75-82ページ

(62) 永田信孝, 1999, 『新・ながさき風土記』長崎出島文庫, 79ページ

スローガンにした排外主義を叫ぶ運動であった。清国政府はこれをおおる政策をとったため北京の列国公使館が清国兵や民衆に包囲され、ドイツ公使や日本の公使館書記が殺害される事件に発展し、各地でキリスト教会が襲われた。これに対して列国は、鎮圧するために軍隊を派遣し、翌年列国と清政府の間で「北京議定書」が調印され、清国は莫大な賠償金を支払い、北京に列国の守備兵を置くことを認めた。この時列国軍の北京進軍のための兵站基地となったのが長崎で、長崎から天津向けに輸出されていた茶はこれ以降輸出先を失うことになった。

1902年にはそれまで石炭補給のために長崎に入港していたアメリカ軍の艦船が入港しなくなった。太平洋地域を航行するにあたって新たにニュージーランドに石炭補給基地を確保したからである。長崎は石炭輸出の大口顧客を一つ失うことになった。くわえて、九州各地で産出した石炭の輸出港に口之津・唐津・三角・博多・門司が加わったことも影響した。また、日露戦争以後、しばしば長崎に避寒・避暑のために訪れていたロシア極東艦隊は来崎せず、ロシア人訪問者は激減した。1904年には居留地への治外法権が撤廃され、外国人居留地が廃止された。

貿易会社をはじめ銀行・保険会社・海運業・各国の領事館などが横浜や神戸に移転し、長崎の居留地は衰退した。それとともに廃業に追い込まれるホテルも続出した。ベル・ヴェウ・ホテル（1906年）、長崎ホテル（1908年）、フランスホテル（1904年）などである。

他方、新たなホテル開業ラッシュも出現した。長崎は国際経済の役割を終えてツーリズム都市へ変化し、アメリカやイギリスのクルーズ船の寄港地としての役割を担うことになったのである。1890年代以降に開業されたホテルには次のようなものがある。⁽⁶³⁾

(63) 浜崎国男、前掲書、75ページ

1895年開業：セントラル・ホテル（後のクリフ・ハウス）

1898年開業：長崎ホテル

1899年開業：ジャパン・ホテル

1900年開業：ホテル・デ・コロニーズ，インピリアル・デ・ツウリス
ト・ホテル，日の出ホテル，ホテル・メトロポール

1902年開業：メイン・ホテル，ブリタイカ・ホテル，

1903年開業：ホテル・デ・フランス，十番ホテル，カイダホテル，ザ・
ピラー・ホテル，ホテル・グルーニー・ヴォストック，
イーグル・ホテル

諸産業の後退のなかでツーリズム産業への移行が模索されたのである。
長崎のツーリズム都市への歩みは雲仙リゾートの開発をも促した。

雲仙リゾートの開発

雲仙は長崎にやってくる欧米観光客にとって格好のリゾート地になった。

江戸時代雲仙に外国人は入山することができなかったが、1877年以降、雲仙を訪れる外国人は増加し始めた。九州各地に滞在する領事や宣教師、長崎に住む外国商社員たちが避暑に訪れたのである。国内の外国人ばかりでなく、海外、時に上海在留の欧米人の避暑地、温泉リゾートとして注目され、来客数が増加するのは1880年代であった。雲仙を体験し他人びとが、その印象を投稿した上海で発行された新聞『ノース・チャイナ・デイリー・ニュース』（1889年）の記事によって上海や香港からの避暑客がさらに増加した。1895年には日清戦争が終結し、ハルピンやウラジオストックなどからロシア人も避暑に訪れるようになった。1911年には小浜から雲仙への登山バスが開業され乗合自動車が走り、県立公園に指定され公園事務所が設置された。1913年には県営のゴルフ場が、外国人避暑客の誘致を

目的として日本で4番目のコースとして開設された。さらに大正年間にはテニスコート、娯楽場、ゴルフ場などが開設されたり、設備が整えられたりした。娯楽場には、ビリヤード・バー・ピアノ・蓄音機・チェス・麻雀などもあり、集会場・映画館・演芸場としても利用された。1927年には「新日本百景」の山岳の部で首位を獲得した。1932年国立公園法による国立公園第1号指定を受けた。国際観光ホテルも建設された。⁽⁶⁴⁾

長崎は明治初期からの近代化への先頭走者ではあったが、次第に経済的、産業的な役割が後退する中で次第にツーリズム都市への移行へ進んでいった。国際港長崎と温泉リゾート雲仙はかっこうの取り合わせであった。イギリス人はインド植民地においていくつもの「ヒルステーション」と呼ばれる高原の静養都市、リゾート都市を建設したし、セイロンではヌアラエリア、フランス人もベトナムにダラットを建設した。中国にも多くの高原都市が避暑、静養のために開発されてきた。日本においても、軽井沢や那須などと並んで雲仙は外国人に人気のリゾート地として発展したのである。

上海—長崎航路

ツーリズム都市へ移行するなかで、長崎は上海との間に定期航路の加発を望んだ。物資運輸ばかりでなく、それ以上に観光客の移動のためであった。

日本と上海の間の航路は1875年三菱会社が横浜—上海ラインを開拓したのにはじまり、後に日本商船はこれを継承して以来30余年間航路開発に努力が続けられたが、時代の要請にこたえることはできないと1909年長崎商業会議所が、長崎—上海航路就航を逓信大臣に求めた。15年の時を経て1923年日華連絡船、長崎丸と上海丸が就航し、週2回の運航を開始した。

(64) 雲仙九州ホテル資料室著、1991、『虹をかけた男 七條達夫抄伝』5-10ページ

「明治後期から大正時代になると、大型客船時代を迎え長崎港は、日本、中国、アメリカ、カナダ、欧州、豪州の各航路の寄港地となり、夏場の雲仙は上海、香港、マニラに駐在する欧米人の温泉リゾートとしてにぎわった⁽⁶⁵⁾」という。大正から昭和初期の賑わいは「明治以来の繁栄の絶頂期⁽⁶⁶⁾」であった。

近代的で欧米風の風情はあるが衰退しつつある産業都市長崎は、高原リゾート雲仙、長崎－上海定期航路開設などによってツーリズム都市としての条件を形成していた。

3. モダンツーリストの目的地としての長崎、雲仙

ここでは、ツーリストにとっての長崎・雲仙がどのような空間であったのかについてみていく。ワールドシステムに周辺部都市として編入された長崎とアジアにおける中心都市上海との間には「上海ネットワーク」と呼ばれるような経済的なつながりができており、かつて17世紀のヨーロッパで発生した中心と周辺との間で発生したと同様な人びとの移動が発生した。すなわち、17世紀周辺部へと後退したイタリア諸都市から新たな中心国オランダなどへの労働力移動と中心国から周辺国へ向かうツーリズム移動という流れが出現したが、それと同様な移動が、近代化する時代の長崎と上海との間でも出現したのである。それを端的に表現している文章を見てみよう⁽⁶⁷⁾。

(65) 岡林隆敏「東アジアのリゾート雲仙」、長崎県企画、2008、『旅する長崎学10 近代化物語Ⅳ レトロ長崎おしゃれ発信地』長崎文献社、42ページ

(66) 岡林隆敏、2006年、『上海航路の時代—大正昭和初期長崎と上海—』長崎文献社、1ページ

(67) 長崎県企画、2008、『旅する長崎学10 近代化物語Ⅳ レトロ長崎おしゃれ発信地』長崎文献社、33ページ

上海航路開設後、上海に渡った日本人は数知れない。「下駄履きで上海へ」と言われるほど、上海は長崎にとって身近な国際都市であった。……昭和初期、上海に住む日本人2万人のうち長崎出身者が3分の1を占めた。当時の住所録には長崎の老舗デパート店だった「岡政」など多くの商店名が連なっている。一方で上海からは現地に在留する外国人たちが長崎を訪れた。上海航路が避暑地雲仙での長期滞在を促し、観光地長崎は東アジアを中心に世界の人に知られるようになった。(長崎県：33)

当時の上海在留フランス人の上海生活の記録のなかに雲仙体験の記述がある。⁽⁶⁸⁾

今年の夏は多くの家族が日本に滞在しました。Aさんの家族は1935年から41年の間に一家で日本を6回も訪れています。Bさんファミリーは、毎年夏は日本で過ごしています。7月14日の革命記念日を終えると、上海を離れて9月の初めまで日本で過ごすのです。大型の客船で日本にわたり、2日後雲仙もしくは唐津に到着するのです。Cさんはいつも、雲仙の印象はとても美しく、まるで天国のようだと言っています。このような夏のレジャー生活は1941年に太平洋戦争が勃発すると途絶えてしまいました。(Boossollet: 125)

雲仙は、長崎を經由して避暑やリゾートを求めてやってくる外国人ツーリストの受け入れの役割を果たしたのであり、周辺部に位置するヨーロッパとも中国とも異なる日本の風景、景観、文化を体験する目的地となった

(68) Guy Boossollet, 1999, *Les Français de Shanghai 1849-1949*, Edition Belin, =2004, 居伊・布羅索來 訳『上海的法国人 1849-1949』上海古籍出版社, 125ページ

のである。欧米人の入植者や産業家たちが本国の都市を模して建設したロンボやサイゴンなどのコロニアル諸都市とは趣を異にする長崎は、日本の伝統技術をも用いた和洋折衷の洋館建築など特異な景観を見せていた。欧米人にとって長崎は、異国のなかの欧風空間であり、コロニアルな雰囲気もあるエキゾチックな景観であった。カプランが言う帝国主義ノスタルジアの対象となったのは当然であろう。

この後も一貫して長崎は、ツーリズム都市としての発展が求められた。ナッシュは、モダンツーリズムの特徴について、「ツーリズムは、ツーリストと彼らが居住するメトロポリスの持つ諸力が、デスティネーション地元民との取引である⁽⁶⁹⁾」と論じた。

ツーリズムの過程は、生産の中心あるいはメトロポリスにおいてその刺激が発生し、次にツーリストのニーズを満たすためにデスティネーションを選んだり、創出したりして、さらに生産の中心とデスティネーションの間取引がなされる。その取引は帝国主義的であって、メトロポリス—サテライト、中心—周辺といった空間的な構造をもっている。デスティネーションは、ツーリストの発生源となる地域よりもわずかに生活水準が低くあるのだ。(ナッシュ：59)

ナッシュの議論は、近代におけるツーリストおよびデスティネーション空間の発生を説明するもので、長崎のツーリズム都市への移行をよく説明していると言えよう。

(69) ナッシュ「帝国主義の一形態としての観光活動」前掲V・スミス編著書所収、55ページ

4. 現代長崎のヘリテージツーリズム

長崎市への観光客数の推移をみると、1980年代右肩上がり増加し、1996年628万人というピークを示した後減少傾向に転じ2004年には最少(439万人)を記録した。日本が世界の工業国としてバブルに沸いた時期にピークに達したツーリスト数は、その崩壊、新しい時代が始まると低迷したのである。モダンツーリストは終焉し、ポストツーリストの波が長崎にも及んだのである。

モダンからポストモダンへの移行は、欧米先進諸国では1970年代から始まり、日本では1990年代に入ってからであった。それは、豊かさや科学、経済発展を追求するモダンがもたらした人間疎外や自然環境破壊、公害などの諸問題に対する反省や批判を契機としていた。新しいポストモダンの世界で繁栄することができる資本の配置は、労働力の非物質的、協調的、コミュニケーション的、そして情動的な新しい組み立てに適合し、それを支配することを可能なものに限られる。⁽⁷²⁾それはサービス業に代表される分野である。そしてこの時代、ツーリズムの新たな潮流はエコツーリズム、ヘリテージツーリズム、グリーンツーリズム、サステナブルツーリズムなどの語で語られるが、これらはモダン末期の疎外・公害への反省と新たに発見された自然や歴史文化の稀少性、重要性や不可逆性から提案されたものであった。交換価値としては無価値であると考えられていた自然空間や歴史遺産、農業空間などが新たな時代には貴重で価値があるかけがえのない環境であることを発見した人びとは、それらを価値ある観光「資

(70) 九州産業局、平成21年、『国内外からの観光集客人口の増加による地域経済活性化の可能性調査 事例集』9ページ

(71) アーリ1990=1995、第5章

(72) ハート&ネグリ、前掲書、358ページ

源」として認識するようになり、デスティネーション空間として活用することにした。他方、貴重で保護、保存すべき諸空間の現状維持を図るためにもツーリズムが利用された側面もある。

長崎はヘリテージツーリズムに特化したツーリズム都市としての新たな可能性を模索している。

(1)ヘリテージツーリズム都市長崎

ポストモダン段階に入った長崎は、それまでの産業都市からツーリズム都市、それもヘリテージツーリズム産業への道を歩んでいるように見える。ポストモダンの時期とは、「観光のまなざしのグローバル化によってあらゆる種類の場所が観光のまなざし対象となった」段階であり、観光地の国際分業が起きているのであり、各国各都市は自らがどのようなまなざしの対象なるか知らなければならない。アーリによれば例えば、「英国は歴史や遺産観光に専一するようになり、その結果これが海外からの客がやはり見たいもの、英国の国民も国内でなら行楽の対象にしたいと思うものとなっている⁽⁷³⁾」。同様な選択が長崎においてもなされたのではないか。英国の1980年代きわめて急な脱工業化は深い喪失感を生み出した。一つは技術、もう一つは技術を中心に発展してきた社会生活の喪失であったのだ。その敷地や建物を保存して、そのまま別の用途に使用し、住宅、事務所、美術・博物館、レストラン用に改装するなどした。モノ作りから遺産の製造へと産業を変化させたのである。

長崎において遺産産業の資源となる歴史や遺産にはどのようなものがあるか見てみよう。きわめて特徴的で他には見られない歴史を長崎はもっているのだ。例えば、東洋のローマと呼ばれ多くの教会があり長崎の住民の

(73) アーリ, 2011=2014, 84ページ

ほとんどがキリシタンであった時代の遺産、迫害され処刑された信者たちの「日本二十六聖人殉教地」、江戸時代唯一の交易港として西洋文化への窓口となった出島およびオランダ文化、中国商人との交易に関わる唐人屋敷・新地・中国文物、長崎の町民がこぞって働いた貿易産業・長崎会所、丸山の物語、卓袱料理、幕末に活躍する内外人士の足跡、明治期の外国人居留地に関わる遺産、近代産業化遺産（造船所・炭坑）、原爆投下に関わる遺産、幾重にも重なって蓄積されてきた遺産を保存し、語り継ぐというポストモダンのツーリズムの資源となっている。

遺産保護、遺産観光を創出する人びと

長崎市では伸び悩む観光客数の増加に貢献したのが「長崎ランタンフェスティバル」と「長崎さるく」である。

ランタンフェスティバルの前身は、1987年から新地中華街で始まった旧正月の祭りの「春節祭」である。その後長崎市と新地中華街とが協力するかたちで、1994年から「長崎ランタンフェスティバル」として開催されるようになった。中華街周辺の商店街とも連携して拡大した結果、集客数も開催当初の30万人であったが2011年85万人、12年77万人、13年1010万人と増加した。⁽⁷⁴⁾

さまざまな遺産を素材として多様なヘリテージツーリズムが提案される。そうしたところでは、多用途に活用される建築物や街並み、新たに開設された博物館や美術館、ほとんどいたるところで過去の何でもが保存されているという感じになる。⁽⁷⁵⁾長崎においても同様なことが出現している。例えば、きわめて数多くの博物館や美術館が町の各地にあって、町の歴史を物語っている。それらをみると、長崎歴史文化博物館、出島和蘭商館跡、

(74) 長崎市、2014、『平成25年長崎市観光統計』17ページ

(75) アーリ、2011=2014、210ページ

シーボルト記念館，亀山社中資料展示場，三菱重工長崎造船所資料館，旧上海銀行長崎支店記念館，長崎市水道資料館，長崎市高島石炭資料館，孔子廟中国歴代博物館，旧長崎税関下り松派出所（べっ甲工芸館），東山手十二番館（旧居留地私学歴史資料館），日本二十六聖人記念館，原爆資料館など多様である。

こうした建物や遺産の保存は，地域性の「特質」を毀損するような新しい開発を防ぐという意味がある。さらに保存運動は，開発阻止ばかりでなく，今ある建築物の修復，町全体の風景や景観のカギとなる様相を保護することもある。こうした運動を盛んにさせた要因の一つはイギリスではサービス階級の男子が移動せず土地への執着を増大させた「サービス階級の地域化」⁽⁷⁶⁾があった，とアーリは分析しているが，長崎にも同様な人びとの活躍がみられる。まち歩き「長崎さるく」の活動である。

長崎市は2006年「街歩き」をテーマにした博覧会「長崎さるく博'06」を開催した。さるくとは長崎の方言で「ぶらぶら歩く」の意味。博覧会にはパビリオンは一切なく準備されたのは，長崎の魅力を堪能できるように市民と行政が作り上げた「街歩きコース」とそのツアーであった。さるく博は「市民プロデューサー（45名）」を中心に，42のさるくコースが作られ，「さるくガイド（325名）」と「さるくサポーター（184名）」が養成され，メニューも特製マップを片手に自由に歩く「長崎さるく」，さるくガイドの説明を聞きながら歩く「長崎通さるく」，専門家による講座や体験を通して深く探求する「長崎学さるく」の3種類に分かれている。このさるく博の試みは，市民プロデューサーらを中心にしたNPO法人与行政が，その後の長崎観光の基本的なパターンとして運営している。

(76) 同上書，222ページ

(2)長崎来訪者にとって

「長崎さるく」は、ポストモダンツーリズムのまなごしに適合したプログラムで、その成果は長崎市の観光者数の増加に反映している。国内のツーリストが求める者には対応しているが、インバウンドツーリストには反映していないという指摘がある。最近のインバウンドは、中国・韓国・台湾などの東アジアや東南アジア諸国からの旅行者が顕著で、中でも好景気の中国からは飛行機やクルーズ船で大量に来日して「爆買い」と呼ばれるショッピングを楽しんでいる。こうした人びとにとって「長崎さるく」のプログラムは縁遠いものであろう。長崎の街中に点在する歴史的な物語を地図や情報持って散策する、あるいは市民ガイドや専門家の説明やレクチャーを受けると言う志向をもって長崎を旅行する東アジア諸国の人びとは多いとは考えにくい。それは、中国社会自体がモダンの真ただ中にあり、フォーディズム的な生産重視の段階にあり、ポストモダ的なまなごしを持っていないと考えられるからである。今後いずれの社会もがポストモダンの段階に至る時に相互のツーリズム関係もまた変化するだろう。

おわりに

ツーリズム都市長崎の空間的記述を試みてきたが、ここで短い整理を行っておこう。空間生産論にしたがって、物理的空間、思考された空間、生きられる空間の3空間をベースにして整理する。

近世長崎の物理的空間は、キリシタン大名によってイエズス会に寄進され、教会などが建立されキリスト教徒が集住する小ローマと称されるキリシタン空間であった。ここに思考されたのは、脱キリシタン空間であり国際交易事業空間である。ユーザーである中国人游客にとっては中国人ディアスポラ空間、日本的旅・遊女のおもてなし空間であり、安心・安全・快

適な遊興空間であった。

19世紀中ごろ以降ワールドシステムへの編入窓口となった長崎は、物理的歴史的条件を基礎にして欧米人の居住空間、産業空間を含む産業都市として発展したが、19世紀末期には衰退しツーリズム都市への移行が始まった。思考されたツーリズム都市としては、衰退した産業都市空間に加えて雲仙リゾート空間が生産され、さらに航路によって上海と結合された空間が形成された。こうして長崎は、上海や日本、アジア各地に住む欧米人や買弁たちにとって帝国主義ノスタルジアの対象になったのである。

20世紀末から現代にかけての長崎は、ヘリテージツーリズム都市への歩みを速めている。長期間にわたって蓄積してきた様々な時代の歴史遺産や文化遺産を保全し、発掘し、説明するヘリテージ空間の生産、ヘリテージ産業の活性化を目指している。